

略歴に見られるように、杉山先生は1967（昭和42）年11月に広島大学文学部に赴任して来られた。当時のフランス語学フランス文学教室主任、佐藤弓葛教授に請われてのことであった。それ以前は先生の母校、大阪外国語大学で教鞭をとっておられたのである。以後1974（昭和49）年3月までは助教授として、佐藤教授を助け、同教授とともに教室運営および学生の指導にあたられていたが、同年3月に佐藤教授が筑波大学に転出されてからは、初代の中村義男教授、第二代の佐藤教授に次ぐ第三代の教室主任となられ、翌1975（昭和50）年4月には教授となられ、赴任されてから去る1988（昭和63）年3月に退職されるまで、20年余、そのうち教室主任として14年間、広島大学文学部のフランス語学フランス文学教室において、研究・教育に従事されてきた。その間仏文関係だけで200名以上の学生が教室で先生の講義を聞き、卒論の指導を受けて卒業していき、一般会社、学校関係、自営業、その他で活躍している。また大学院で専門的研究指導を受けた者も30名以上にのぼり、そのなかには研究職についている者も少なくない。本研究会の賛助会員の大半がそうである。

その広島大学フランス文学研究会を1982（昭和57）年に創設されたのが杉山先生である。このような会を組織してはという案はそれ以前からあり、大学院生を中心に何度か提案されては諸般の事情で実現に到っていなかったのであるが、1982年に到ってついにその機が熟し、先生の英断により、実現したものである。その後は賛助会員の方々に支えられながら、順調に発展し、年一回の研究発表会と本誌の発行およびその合評会は欠かされたことがなく、さる7月には第7回研究発表会が開催され、本誌も第7号の発行となり、会員、特に大学院生にとって貴重な研究発表の場となっている。杉山先生のなされた功績の重要なものの一つと言えるであろう。

また先生の御活躍は広島大学内のみでなく、日本フランス語・フランス文学会の幹事その他の役員をはじめ、1984（昭和59）年からの2期4年間は同学会中国・四国支部長として、この地区のフランス文学研究の中心的役割を果たしてこられた。これらの功績により、1980（昭和55）年にはフランス政府から教育功労勲章（L'Ordre des Palmes Académiques）を授与されている。

先生の御専門は、サン・テグジュペリ、アンドレ・マルロー、マルセル・エイメ、シモーヌ・ヴェイユ、レーモン・ジャンを中心とする20世紀文学であるが、詳しくは

著作目録を御覧いただきたい。これら研究対象として選ばれた作家を通して、また先生の諸論文を通して、そこに杉山先生ならではの一本の筋が通っているのが分かるであろう。

その一本の筋とは何か。それは御退職の3か月前に出版された『緑の中の廃墟』（深水社）をお読みいただければ明らかとなるであろう。そこには、先生にとってフランス文学研究とは何か、文学研究とは何か、文学とは何か、人生とは何か、すなわちフランス文学研究者としての杉山先生御自身の、文学に対する根本的態度および人生観が暗示されていると言えるであろう。

なお同書はそのような内容面からだけでなく、創作技術の面からも高く評価されるであろう。筆者にそれを云々する資格はないが、ただ、同書に収められている短編が雑誌『歯車』に別々に発表されたときすでに、その内容については深い感銘を受けたにもかかわらず、その創作家としての才能については、このたび一書にまとめられて初めて強烈な衝撃を受けた、ということをお告げしておきたい。

先生のお人柄についても、同書をお読みいただければ自ずから明らかなので、いまさら何も付け加えるべきものはないが、厳しい事柄をもやわらかいユーモアにくるんで表現されるそのやり方は、誰にも真似のできないものであり、接する者に安心感を与え、同僚からも学生からも親しまれ愛されている。去る二月に開かれた先生の送別会に、世話人の予想をはるかに上回る多くの卒業生が集まったのは、そのことを何よりもよく物語っているであろう。

先生はいわゆる停年まで後7年を残して退職された。澁む水は濁る、というのが先生の信条なのである。先生の人生哲学、否、美学を見る思いである。